現代朝鮮文学叢書5

ある自衛団員の運命

著者　創作集団
訳者　卞宰洙
発行　朝鮮画報社
東京都文京区白山四―三三―一四
電話〇三（八一三）七五二一～四
印刷　新協印刷
製本　（株）宮田製本
一九七八年九月九日　第一刷発行

落丁、乱丁本は本社にておとりかえします

現代朝鮮文学叢書 ⑤

ある自衛団員の運命

この作品は栄えある抗日武装闘争時期に創作された不朽の古典的革命演劇『ある自衛団員の運命』を小説化したものである。

著　集団創作

訳　卞宰洙

目次

第一章……5
第二章……68
第三章……151
第四章……200
第五章……241
解説……284

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

1

鬱蒼たる密林が果てしなくつづく。

数百万の大軍がかざす矛先のように天空を衝いて茂る常緑樹の密林は、ゆるやかな起伏をなして地平線の彼方へと波打っていく。矛先に降りた、秋霜を思わせる密林の白銀は重々しく、どこか冒しがたいような風格があった。

足早の冬の陽は朝から樹海を泳ぎはじめるのだが、昼どきを過ぎる頃になると、力つきて遠く西の密林の彼方に真紅の塊となって傾く。

獣の咆哮にも似た唸りが起きると、さっと雪煙が舞いあがり、風が樹海を吹き渡る。すると、陽は急いで吹雪の中へ姿を隠してしまうのだが、太古の密林は大海の威厳を失うこともなく悠然と波を打って揺れる。

吹雪がおさまった空の端には、影の薄らいだ太陽が得体の知れぬ威容の前にひざまずいて不安におののく。陽は天空の一角にしがみついたまま、いまにも凍えんばかりだ。

連日零下四十度もの酷寒が密林を襲う。どこへ隠れるのか、密林に生きる獣もこの季節になるとその影すら見えない。北辺の地の王者である虎でさえ、この真冬には深い洞窟にうずくまって空き腹をかかえ、憂うつな目で吹雪の山河を眺めるという。

この凄絶な冬にひざまずかないのは密林と人間だけだった。雄々しく、節操の堅いこの地の密林には、猛暑の夏やうららかな春の日より、厳しい北国の冬が性にあうのかも知れない。しかし人間は生きるために冬と闘うのだ。

一攫千金を夢みる材木商たちは、厳しい冬の間に力のかぎり木を伐って蓄え、渓谷に雪解けの水があふれる春を待つ。春には渓流に、筏ならぬ黄金を浮かべるのだ。

飢餓と酷寒の真冬、貧しい人々は生きるために山に入って木を伐る。

どんな生命も棲息できるとは思えないようなこの北辺の密林にも、無数の伐採場があって斧の音を響かせて木を伐った。

徳山木材所は樹海の東端の谷間にあった。

伐採場も夕陽に染まった。

冬至を過ぎると弱い冬陽は一段と薄くなる。ゆったりとのびる谷間や山の背の森を、薄紫の煙霧のような夕焼けが美しく染めた。昼の間は風ひとつなく、刺すような寒さだった。落日につれて軽い風が起こり、森の梢がザワザワと音をたてた。

伐採場は活気にみちあふれていた。

この時刻には、いつも、谷間の両裾に散在する伐採場や土場や牛車道に監督たちの罵声が飛びかって、山全体がわきたつのだが、今日はとくに活気をおびていた。

伐採場に斧の音がこだまし、山を切り裂くような鋸の音が小気味よく響く。ここかしこで大木の梢が宙に浮き、地響きをたてて倒れた。雲のような雪煙があがった。

谷底の牛車道や土場からは騒々しい馬のいなきや物憂げな牛の鳴声が聞こえ、てこを使う声や、もっこを担ぐ人夫のかけ声が暮れゆく山の風情を醸し出す。

監督がどんなに毒づいても、苦役に疲れきった人夫たちは仕事に身を入れようとしない。しかし、今日のように月末が近づくと、監督が声をからすまでもない。人夫たちは空き腹をこらえ、一本でも多く木を伐り出すために目を血走らせた。勘定日が近づくにつれ、彼らは悲痛な思いにとらわれるのだ。貧しさに喘ぐ郷里の老いた父母や哀れな妻子を思って胸をかきむしった。銅貨を一枚でも余計に送ってやりたいという悲痛な願いに、貧しい飯場の飯さえ日に一食、二食と抜き、歯をくいしばって働いた。

しかし、監督という連中は元来がそう生まれついているのか、今日も現場をのし歩きながら口汚くののしっている。

谷の奥の森に、膝を雪に埋ずめた一人の若者がいた。彼は鉄の鎧をまとったような大木に、力強く斧を入れていた。

風が地面の雪を巻きあげたが、綿入れのうわっ張りを胴着ごと脱ぎ捨て、荒麻の単衣のまま斧を振っている。

赤銅色の顔から筋肉が波打つ太い首、体中に滝のような汗が流れる。

研ぎすました斧を軽々と頭上にかざし、

「えいっ！」

声をふりしぼって力いっぱい振りおろすと、斧が、太い根もとに深くくいこむ。大きな木片が飛び散り、高い梢は身を震わせて雪の粉を振り落す。汗にまみれた若者はふりかかる雪など気にもかけず、

「うむ」

と両足をふんばって斧を抜き、再び振りあげる。堅く結んだ厚く大きな口もとが、柔らかなうぶ毛におおわれている。二十歳近くの若者だった。

夢中で振っていた斧を横において泥雪にまみれた足で木を軽く蹴ると、たくましい肩を幹にぴたりと押しあて、両足をふんばって力を入れる。高い梢がぐらつき、幹をよじる。

厚い唇をくいしばって渾身の力をふりしぼる。太い首に喉仏が突き出る。轟音をたてて大木が倒れはじめた。

「倒れるぞっ！」

と叫び、木の下からすばやく身を避けた。大木は周囲の木々の枝をへし折り、雪煙を舞いあげ、ズズズーンと地面に倒れた。

たくしあげた鋼のような両腕を腰にあてて、若者は白い歯をの

ぞかせてニッと笑う。
「ずいぶん手こずらせたな……」
雪をかぶった斧をふたたび手にして、大股で倒れた木に近づいた。
「おーい、甲龍(カブリョン)、またやったかぁ、何本めだっ」
右手の方で誰かが叫んだ。
若者は声のする方を見た。少し離れた大木の下に、犬皮帽をあみだにした長身の若者が斧を手にして、大きな口をあけて笑っている。彼の木もほとんど倒れかけていた。声をかけられた若者が笑顔でうなずいた。
「もう、それくらいでやめろよ。これさえ片づけりゃ、おれもおしまいだぁ」
斧を振りあげながら向こう側の若者が叫んだ。甲龍と呼ばれた若者は黙ってうなずいた。すばやく小枝を払い、木の根もとと梢を切って見事な丸木に仕上げた。
若者は斧を手にしたまま空を仰いだ。鬱蒼と茂った梢から夕陽がこぼれていた。彫りの深い若者の顔に決意がみなぎり、数歩の所に立っている二抱えほどの木を見つめた。彼は大股で近づき、両手にしめりをくれて斧をにぎりしめた。
夢中で木を伐っていた彼が頭上で斧をとめ、ふと稜線のほうへ耳を傾けた。灌木の茂みにさえぎられてよく見えないが、呻き声のようなものがはっきりと聞こえた。若者は斧を力いっぱい幹に打ちこむと、雪を踏みわけながら稜線に向かって登って行った。
灌木の茂みをよけて前に出た。もう一人別の若者が木を倒そうと、両足を雪にふんばっている。すっかりもてあましていた。足早に近づいた甲龍はその脇から黙って肩を入れた。木を押していた若者が顔を向けた。ほっそりとした顔が上気して汗にまみれていた。
「大丈夫だよ、おれ一人で」
「さあ、一緒に押そう」
照れたように笑う彼にはかまわず、手を貸しに来た若者は岩のような肩をしっかりと幹にあてがった。二人が一気に力を入れると、木は悲鳴をあげながら倒れた。
「万植(マンシク)、枝でも払って休めよ。もうすぐ時間だから……」
心を顔にあらわさぬ性分なのか、手を貸しに来た若者はひどくぶっきらぼうだった。しかし、善良そうな小さな目や言葉つきに、暖かい思いやりがこもっていた。
「うん、おれにかまわないで早くおりて行けよ」
万植と呼ばれた若者はすまなさそうな表情をした。
甲龍は雪を蹴散らして戻り、また斧をにぎった。
彼ら三人は、ここから十里ほど離れた南陽(ナムヤン)という村の若者だった。今日も、彼らは互いにはげましあいながら、一日中、木を伐った。
宵闇が谷間にしのびよった。現場事務所の軒下に人影がちらついて、力なく半鐘が鳴る。現場の事務所は傾斜のゆるい谷間の入口、丸裸の山麓にあった。
半鐘が鳴りやむ前に、伐採場の騒音は嘘のようにとだえて、濃霧のような薄闇におおわれた谷底の牛車道を、仕事を終えた人夫や牛馬のそりがぞろぞろとおりて行く。きれぎれに聞こえる話し

声、のんびりした馬の鈴、物憂げな牛の鳴き声などが、突然おとずれた山の静寂をさらにきわだたせた。

人夫たちの影も鈴の音も消えた。山は深々とした静けさの中に沈み、谷間の闇は刻一刻と濃くなっていく。遠く谷の出口に向かって広がる殺風景な野に伐採場の村が見え、箸のように立っている細い煙突から青白い夕餉の煙が立ちのぼっている。

谷間の一番奥で木を伐り、監督の検尺をうけた南陽村の若者たちは、他の人夫より一足遅れて山をおりた。三人は後になり先になり、夕餉の煙がただよう谷間の外れの飯場に向かった。

牛馬のそりが原木を運び出す坂道は、冬中踏み固められて氷のように光っている。深い雪の中で一日中木を伐った若者たちのズボンの裾には雪と土がこびりついていた。凍りついて毛皮のようにかたくなったズボンの裾が、歩くたびにゴワゴワと音をたてた。

斧を肩にした長身の喆三が先頭を長い足で大股に歩いた。彼は歌を口ずさんだ。

雨にうたれて桐の泣いた夜
故郷を離れた　懐しい友よ

肩にかけた犬皮の上着が歩くたびに風にはためく。

少し遅れて崔甲龍が歩いていた。背はあまり高くない。粗麻の単衣しか着ていなかったが、体つきは見るからに頑丈だった。強くしめた腰の繩紐に斧をさし、胸を抱くように組んだ両腕をよれよれの上着の袖にさしこみ、心もち背を丸くして黙々とついて行く。大木を一人で伐り倒した屈強な若者とは思われぬほど、人のよさそうな顔だちだ。ボサボサの頭をうつむきかげんにして歩いている。ときおり、彫りの深い顔をあげてチラッと前を見る。なにか思い惑っている様子だ。寒さは厳しかったが頭にはなにもかぶらず、顔は上気していた。

万植が肩を並べて歩いていた。

大木をもてあましていた若者だ。背丈は甲龍ほどだったが、大きな綿入れを着てもほっそりとして、顔立ちも面長でどこか弱々しい。遠い谷を見つめながら歩いている。谷向こうの山頂の落日が空の一角をわずかに染めていた。夢多い娘のような目に寂しさがやどっていた。

三人は急ぐ様子もなかった。

甲龍はずっと物思いに沈み、うつむいている。一日中雪や土にまみれ、それがそのまま凍りついた彼のわら靴は木枕のようになり、歩くたびにギュッギュッときしんだ。それは監督の長靴を思い出させた。

彼はどうしていいか分からなかったのだ。村を発つとき、彼ら三人が約束しあった仕事の期限は、あと五日しか残っていなかった。五日後に彼らとともに帰るべきかどうか、迷っていた。

内向的な彼はそぶりにこそ見せなかったが、ここ数日間、そのことで頭がいっぱいだった。それがいまだに決心がつかないのだ。父と琴順や姉が自分の帰りを首を長くして待っているはずだ。先日やって来た村の人が父の言づけを伝えてくれた。金の心配などせずにすぐ帰れ、婚礼の準備はどんなにしてでも自分たちがととのえるから、くれぐれも、配せぬようにという便りだった。山で怪我人が出たという噂に琴順が胸を痛め、人知れず村は

ずれの丘に出て、遠い空を見つめては溜息をついているという。その場にいあわせた万植と喆三の二人が、予定の期限を終えたらすぐ帰ろうと言った。甲龍は無意識のうちにうなずいたが、帰る決心はつかなかった。

おぼつかぬ九九算を頭でくり返しながら計算してみたが、せいぜい五円札一枚手に入れば上出来だった。いや、それもむずかしいかもしれない。十円は稼ぐつもりだったのが、すっかりあてがはずれた。山に来てまでこんな目にあうのかと思うと、腹立たしくてならなかった。はじめの半月ほどは現場監督の「イタチ」にすっかりだまされた。伐り倒した木の太さを計るとき、三人の若者が世故にうといのをいいことに、監督は彼らをだましたのだ。監督は梢と根もとを計って平均値を出す代りに、細い梢の方だけ計った。山の古老朴(パク)老人がそれを知り、二度とだまされぬように釘をさしてくれた。しかし、すでに半月もたったあとだった。おおざっぱに計算しても三円はだましとられた。飯場の飯代の高いことにも腹が立った。腐ったような粟飯一碗と塩汁一杯で日に二十五銭もした。町なら日に十五銭も出せばよほどましなご飯にありつける。飯場からも二、三円はまきあげられただろう。わずか一か月足らずの間に、五円というまとまった金をだまされたことになる。その金をあわせれば、一か月の稼ぎが十円は越すはずだ。それさえあればなにをためらおう。五日後には一気に駆け戻って父の前に金を差し出すことができる。そうしたら、昨年の秋から冬にかけて、婚礼が心配でひどくふえた父のしわもいちどにのびるはずなのに——。

だましとられた金が惜しくてならなかった。掌中の鳥を逃したような口惜しさだ。しかし、訴えるところもなかった。

彼は肩を落して溜息をついた。

(どうしたものだろう。父の言葉どおり、せめて五円でも持って帰ろうか? 婚礼にはまだ一か月以上もあることだし、もっと稼いでから帰ろうか?)

しかし、五、六歩も行かないうちに、また迷った。白髪の父の顔が眼前に浮かんだのだ。台所につづく部屋のあがりかまちに坐って安たばこをくゆらし、夜もすがら息子を案じているにちがいない。山の労働は父が気にするほどきつくもなく、危険とも思わなかった。彼は人一倍強健な肉体と剛毅な意志を持っていた。必要であれば、いまより十倍、いや百倍も苦しく危険な仕事でも、十分に耐え抜く自信があった。

彼の迷いは、もう一か月耐えねばならぬ苦役のせいではなかった。父にかける心痛や苦痛のためだった。どんな小さなことでも、父の胸を痛めることだけはできなかった。純朴で情深いせいもあったが、乳首をくわえたまま母を亡くした彼は、父の手ひとつで育った父親っ子だった。南陽村はもちろん、この近隣では盲目の沈(シム)老人(朝鮮民話『沈清(シムチョン)伝』に出てくる盲目のやもめ—訳注)のような父親に沈清(その孝行な娘—訳注)のような息子だと、評判であった。父は一生をわびしいやもめ暮らしでおしとおしながらも、息子のためにすべてをささげた。それだけに彼は物心がついて以来、父にさからったり、心配をかけたりするようなことは決してなかった。

彼が今年婚礼をあげようと決めるまでには、多くの曲折があった。父が息子の婚礼を是が非でもあげようと思いはじめたのは昨

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

年のことだった。しかし、甲龍は彼なりに思うところがあった。父の願いを無視するわけでもなく、許嫁の琴順が気に入らぬせいでもなかった。もっとも、村に万植や喆三のように十九や二十の同年輩も多いなかで、自分一人だけが結婚するとなれば気恥ずかしいことはたしかだった。しかし、それくらいのことで父の願いをむげにする彼ではなかった。今年の春が父の還暦だった。父の還暦祝いもしないで婚礼をあげる気にはなれなかったのだ。姉と相談した結果、婚礼を二年ほど延ばし、秋の収穫がすんだら木綿の服を一着仕立て、地酒を一かめ仕込み、村の老人たちを招いて、ささやかながら父の還暦祝いをすることにした。

しかし、父の願いも、孝行息子の望みもはかない夢にすぎなかった。昨年はかつてないほどの凶作に見舞われた。ところが、地主は例年通りの小作料を取りたて、官庁は官庁で地税、戸税、山林税、それに雑付税や区長料米など、わけの分からない名目をつけて農民を収奪した。甲龍一家も、つぎの年の秋まで食いつなぐことさえおぼつかなくなった。その翌年、つまり、この春に、地主の許区長から長利（年に倍の利息を支払って穀物、金を借りること、又はそうして借りたもの―訳注）を借り入れてやっと命をつないだ。

父と子の願いは、つぼみのまま埋れてしまった。もう一年、汗水たらして野良仕事に精を出して秋の取り入れを待ちわびた。秋が来た。だが、今年の秋も二人の願いをかなえてはくれなかった。作柄はどうにか平年並みだったが、例年どおり税金を納めて長利を返すと、食糧はいくらも残らず冬越しがあやぶまれた。父が許区長を訪れて長利の返済を一年延期してくれと、地面に額をすりつけて頼みこんだがむだだった。

それでも、父は父なりに、息子は息子なりに今年こそは長年の願いを成就させようと心に決めた。

秋の取り入れを終えた頃だった。キセルをふかし幾日も眠れぬままに夜を過ごした父が、息子と娘を呼んだ。

「あちらとも話しあってみたんじゃが、今日明日にでも日どりを決めて、婚礼をあげようと思うのじゃ」

甲龍は驚いて父を見つめた。父は一歩もゆずらぬ気配だった。困りぬいた彼は姉に助けを求めた。姉もまた、驚きの色をかくしきれないでいた。この歳になるまで、父の言葉にさからうなどとは夢にさえ考えなかった。しかし、今度ばかりは、はいと素直に答えることができなかった。見かねた姉が、父の前にいざりよって言った。

「お父さん、甲龍の婚礼は来年にのばして、今年こそはお父さんの還暦祝いをしませんと。甲龍もずっとそのつもりで……」

「なにをばかなことを、わしの還暦なんぞどうでもいい。母さんが生きてるなら別じゃが、わし一人が長生きしたのじゃ、還暦祝いなんどしなくていい。もう二度と口にするな。わしゃ、日どりを決めにちょっと出かけてくる。それから、お前はいらぬ心配などせんでわしの冬服でも繕っておいてくれ。山へ行って二か月ほど稼いでくるつもりじゃ。嫁に人絹の服の一着も着せてやらにゃのう」

父はそれ以上耳をかそうともしないで、そそくさと出かけてしまった。

父のこんな一徹さを初めて見た姉弟は、放心したように顔を見

あわせた。しかし甲龍は、こればかりは父の言葉に従えないと、かたく心に言い聞かせた。ただ一人しかいない父の還暦祝いをさしおいて自分の婚礼を先にあげるのは、どう考えても、息子としての道理に外れていた。姉も同じ気持だった。それで、父が帰宅したら、姉がもう一度話してみることにした。

奥の部屋で木枕をあてがって横になった甲龍は落ち着かなかった。父はすっかり夜が更けてから帰って来た。台所つづきの部屋から父と姉の話し声が洩れてきたが、はっきり聞こえなかった。しばらくすると、仕切戸を開けて姉が入って来た。彼ははじかれたように起きあがった。甲女(カフニュ)は弟の横に坐ってしばらくためらっていたが、急に彼の手を強く握りしめた。

「甲龍……」

「どうだった、姉さん」

彼はいざり寄った。見返す姉の目が涙ぐんでいた。彼はひどく不安になった。

「お父さんのおっしゃるとおりにするしかないみたい……」

「えっ、じゃお父さんの還暦祝いもしないで」

思わず声が高くなった。

「お父さんに聞こえるわ。甲龍、お父さんはね、今日のこの日まで甲龍一人を楽しみに命をながらえてきた、あれの婚礼だけが最後の願いだ、婚礼さえすませれば、いつ死んでも心残りはないと、こうおっしゃるのよ」

「でも婚礼なんか、今年でなくたって……来年だってさ来年だって、いつだってできるけど、お父さんの還暦は今年でないと、もうできゃしないよ」

こうは言ったものの、父が婚礼をそんなにまで願っていたとは知らなかった。彼は気が重くなってきた。

「甲龍、これ以上お父さんに心配かけないで。昨年あたりからめっきり白髪がふえて、今年に入って腰まで曲がってしまったわ。喘息もひどいし、これからさき何年もちこたえられることか……。姉さんね、お父さんの話を聞いているうちに、お父さんの気持に逆えなくなってしまったわ。わたしたちを育てるために腰が曲がり、わたしたちを心配するあまり、あんなに白髪がふえたのかと思うと……」

と、姉は涙ぐんだ。

「姉さん、なんてこと言うんだい」

胸の中でなにかが音をたてて崩れるような気がした。隣りの部屋で父が咳こんだ。ここ何年の間にめっきりと老けて気力もおとろえた父であった。

だが、老衰や死を考えるにはまだ若かった。もちろんそれを父と結びつけたことはなく、またそれはゆるされないことだった。父の死、そんなことがあっていいだろうか？　天地の崩壊はあり得ても、いま、父の死はあってはならなかった。

突然な姉の言葉に、老父の姿があざやかに浮かんだ。父が亡くなることもあり得るのだ。その思いが切迫した現実のように胸をしめつけた。

父をこんなに老いこませた無情の歳月が憎かった。

父の老衰をふせぐ現実的な道は、これ以上、心配や苦労をかけないで、余生をできるかぎり楽しく過せるようにすることしかなかった。

こうして、婚礼の日どりは陰暦十二月の末にきまり、彼は父に代って斧を腰に友と連れだって山に向かったのだった。

それだけに、稼ぎのためもう一か月山にとどまるかどうかを決めるのは、容易なことではなかった。

もう一か月とどまろうにも、心配のあまり眠ってもいないであろう父の白髪が眼前にちらつき、帰ろうにも、「わしにとって最初で最後の嫁なのに、人絹のチョゴリさえ着せてやれないでは死んでも死にきれん」と嘆いた父の声が耳もとに響いた。

甲龍は三日前から夜昼なく考えつづけても、まだ決心がつかなかった。二人の友の後ろから伐採場の斜面をおりて谷底の道にさしかかったとき、ふと、いい考えが浮かんだ。

現場事務所に立ち寄って、稼ぎを計算したうえで決めようと考えたのだ。五円になっていたら帰ろう。姉の話では、五円ほどあれば人絹でチョゴリの一着分買うことができるという。金がたりないようだったら、もう一か月働くよりしかたがない。父は心配するだろう。それでもこのまま帰って金のことで悩むよりはましだ、そんな気がしたのだ。

甲龍は心が軽くなった。

彼は顔をあげ、肩を並べて歩いて行く二人の友を見た。

2

喆三はやはり歌を口ずさみながら、先に立って歩いている。頭の上にはねあげた角のような毛皮帽の耳あてが、歩くたびにゆれた。

さほど遠くない山の端に灯の明るい家が一軒あった。伐採場の事務所だ。甲龍は遅れまいと足を早めた。

桐の葉散る　秋は来たれど
なぜに帰らぬ　懐かしきわが友は

喆三が歌った。山に来て親しくなった「大学生」という仇名の労働者から教わった歌だった。昨夜、喆三と万植が「大学生」からこの歌を習っていた。甲龍は台所の土間で斧を研ぎながらそれを聞いていた。悲しい歌だった。ところが喆三はそれを鼻歌まじりに、軽快で打鈴（クワリョン）（民謡の節まわしの一つ—訳注）でも歌うように歌っていた。闊達（かったつ）な彼にかかると、悲しい曲、明るい曲の区別なく、どんな歌でも陽気な歌になってしまうから不思議である。

彼ら三人は幼い頃から同じ村で育った竹馬の友だった。喆三は豪放で情熱的だった。三人の間になにか面倒なことが起きると、決断をくだして押しまくっていくのは彼だった。

聡明で感受性の鋭い万植は、三人の行動に知恵と情緒を与えた。喆三の無謀さが、彼の知恵と力によって難をまぬがれることがしばしばあった。しかし、いちどはじめたことを最後までやり抜く点では、二人とも甲龍に及ばなかった。この三人を一棟の家にたとえれば、喆三は空に向かってはばたく屋根、万植は明るいガラス窓、甲龍は地中で家を支える礎と言えようか。

こうして三人は互いに助けあいながら深い友情で結ばれ、村人

たちから羨望されるような親友となった。
喆三がふと、歌をやめて振り返り、
「甲龍、婚礼は来月の末だったな」
と、たずねた。
太い地声が、山の寒風に当ったせいか、かすれていた。
甲龍は喆三を見あげた。たくましいなかにも善良そうな彼の顔に狼狽の色が浮かんだ。万植も足をとめた。
「一か月も木を伐ったせいか、嫁をもらう日まで忘れちまったんだな、ウワッハハハ……」
喆三は大きな口を開けて肩をゆすった。甲龍は太い首を肩にうずめたまま、深い目を見張って警戒するように見つめるばかりで黙りこくっていた。とぼけ上手でひょうきん者の喆三だけにとっぴなことを思いついて、一杯くわせるつもりなのかも知れない。万植がニヤニヤ笑いながら二人を見くらべた。しかし喆三はそれ以上話そうとはしないで、また先に立って歩きだした。二人も黙って後ろにつづいた。
「琴順は可愛いいし、心もきれいだ、ほんとうにいいお嫁さんだな」
喆三が不意にこんなことを言った。だんだん雲行きがあやしくなる。甲龍は顔を赤らめた。喆三の口からどんな言葉が飛び出すか、分かったものでない。口べたで正直一点ばりの甲龍では、喆三の口をふさぎようがなかった。とぼけ顔で突拍子もないことを言い出すときなどは手におえない、とにかく、こんなときは相手にしない方がいいのだ。喆三が、
「お前はどんなことがあっても、まともに暮らさにゃならん。琴順や琴順のおふくろさんを見ろ、まったくかわいそうだ。それに、お前一人を楽しみに生きているおやじさんや姉さんのためにもな」
と言ったとき、からかわれているものと思っていた甲龍は、多少驚いて、大股で歩いて行く彼の後ろ姿を見つめた。真剣すぎて彼らしくもない言葉だった。万植もけげんそうな顔をした。しかし、彼はそんなことは知らぬげに、丸太小屋がぎっしりと並んだ遠い谷底を見つめながら歩いていく。額や頬骨や顎など、すべて大づくりで男らしい彼の顔に、苦悩の色が流れた。様子がおかしかった。すべてをあきらめきった老人のようだ。
「急になにをおかしなこと言うんだ。お前だって今年の秋は嫁を迎えて、苦労ばかりしてきた母さんを楽にしてあげなきゃだめじゃないか。お前の母さんだって、喆三が嫁をもらうのを見て死ぬんなら心残りはないって、口ぐせのように言ってるじゃないか」
とぼけ屋の喆三の本心をさぐり出そうと、彼の顔を穴のあくほど見つめていた万植が、甲龍の気持を先に言った。
喆三は足をとめ、ゆっくりと万植を振り返った。彼の大きな目はいつも充血したように熱っぽい。なにか言おうと口もとを動かしたが、突然大きな口を開けて笑った。笑いやむと目のふちを拭いながら、万植に聞き返すのだった。
「おれが嫁をもらうって?」
「そうだ……」
万植は目を丸くして見返した。喆三は腹をかかえて笑い、
「おれはな、嫁なんかもらわんぞ」

と、宣告でもするようにきっぱりと言った。二人はますます驚いた。

「おれ、甲龍の婚礼が終りしだい家を出るつもりだ」

「家を出るって？」

甲龍は目を見はった。

「急にどこへ行くって言うんだ」

万植も聞き返した。

驚く二人を愉快そうにニヤニヤ見つめていた喆三は、ゆっくりと遠い空に視線を投げた。二人も上に視線を移した。手の平ほどの夕焼けもいまは消え去り、夕闇の空の果てに山々のシルエットが物憂げに浮んでいた。

「嫁をもらう代りにな、世間を歩きまわるんだ。万植、お前も一緒に行かんか？」

喆三は目を細くして遙かな空を見つめた。

「世間を歩くって？　間の抜けたこと言うなよ」

「おれのどこが間が抜けてるんだ。お前たちも聞いただろう、あの山を越えれば広い世間があるってことをさ。人間が数十万人も集まっているどえらい都市や、何でも造り出す工場や、でっかい船の浮かぶ広い海や、そりゃ、珍らしいものがなんだってあるっていう、広い広い世間があるそうじゃないか。お前たち、とことんまで見物してみたいとは思わないのか」

彼の視線は憧憬に輝いた。それにひき込まれ、二人も空を見つめながら広い世間を描いてみた。この三人は北辺の僻地の深い谷間で生まれたが、幼いとき母の背にゆられてここに来て育ったのだ。彼らにとってこの世の界線は狭くもあり、無限に広くもあった。彼らが幼い頃遊びまわったのは、南陽村の狭い谷と数里にわたって村を取り巻く屏風のような山の中だった。彼らが育ち、野良仕事や柴刈りをしながら生計を営んできた世界とは、この山奥の数里一帯に散在する幾つかの部落と一つの小さな町だけであった。一口に言って、彼らが生まれ、二十年あまり生きてきた生活のすべては、この僻村をとり巻くわずか数里のせまい柵のなかにとじこめられていたのだ。

こんど山に来たことさえ、彼らの生活にとっては小さくない出来事だと言えた。それはまず、十里も離れた見知らぬ土地、見知らぬ人々の中で、初めて伐採労働をしたという点にあった。しかし、今度の出稼ぎが彼らに与えたもっと大きな衝撃は、長い冬の夜、飯場のむさ苦しい部屋で耳にした広い世間に関する数々の話だった。今年の冬に入ってから大きく拡張されたこの山の伐採場は、徳山一帯の農民ばかりでなく、全国のいたる所から集まって来た渡鳥のような人夫たちでにぎわった。夜になると疲れ切った身体をオンドルに横たえて世間話を楽しむ彼らは、世の中を渡り歩いた体験談を語りあった。話題はつきることを知らなかった。世間は広くて珍らしいものだと思い、見物したいという好奇心がわいた。その反面、空恐ろしい気もした。そんな話にすぐ魅せられるのは、喆三と万植の二人だった。少しは学校へ通ったことのある、山の人夫仲間きっての博識家であり、朝鮮と満州の各地をほとんど歩きまわったと自称する「大学生」の脇に坐りこみ、夜の更けるのも忘れて、毎晩のように話を聞いた。新しい歌も幾つか教わった。

山へ来た当初は、甲龍も話にひきつけられ、彼らの間に割りこ

んで聞いたものだが、次第に離れていった。聞けば聞くほど、何故かその巨大で複雑な世間に、空恐ろしい思いがしだしたからだった。それに、切実な当面の生活とは、あまりにもかけ離れていて、将来自分の一生とかかわりがありそうに思えず、真偽のほども分からないそんな話に夜を過ごすよりは早く眠り、翌日一本でも余計に木を伐った方が得策だと思った。甲龍は食事をすませ、宿所へ戻って斧を研ぎ終ると、オンドルの片隅で、話し声を子守唄にぐっすり眠るようになった。

ところが喆三は、家を離れてその広い世間に旅立つと言うのだ。分別がないというか、ばかげているというか、甲龍はあっけにとられて彼の顔を見つめるばかりだった。山へ来てひどく浮かれ出したものだ。万植も甲龍と同じ気持なのか、不安げに喆三を見つめて言った。

「世間を見て歩くのもいいけど、口で言うようにかんたんにいくかなあ。あてもないのにどこへ行くって言うんだい、頼りになれそうな人でもいるんなら別だけど、世間って、ずい分物騒だって言うし……」

喆三は鼻で笑った。

「頼るところ？　そんなものがあるもんか。いくら物騒か知らんが、こことそんなに変わらんだろうさ。いいかい甲龍」

彼は甲龍に近寄って力いっぱい腕をつかんだ。

「おれはだ、大きな都会地だとか、飛行機や自動車や活動写真見たさに言ってるんじゃないんだ。おれはな、世間からすっかり見捨てられたこの山奥がいやになったんだ。『大学生』の兄貴の言うとおり、人間として生まれたからには、生き甲斐や希望を持って生きるべきじゃないか。一年中もぐらのように必死になって土を耕やしたところで、丸々一年腹をすかし、あげくの果てが借金の山じゃないか。おれは、もうむしゃくしゃしてたまらんのだ」

喆三は、吐き捨てるようにこう言って、暗さを増していく空をにらんだ。

「そりゃそうだな。かと言ってどうしたらいいんだい？」

彼の勢いに圧倒された万植が、遠慮がちに聞き返す。

「だから、村を飛び出そうっていうのだ。この世間ってものがどんなもんか、とことんまで見てやろうっていうんだ。世間は広いそうだから、ひょっとしたら、人間らしく暮らせそうなところがあるかも知れん。そんな所にめぐりあえたら、おれな、お前たちにも知らせてやるよ。お前もおやじさんや姉さんや琴順を連れてやって来いよ。ちくしょう、世間から見捨てられた山奥で、こんなざまして生きていくなんてばからしい。そうじゃないか」

喆三はたかぶった目で二人を見くらべた。まじまじと喆三を見ていた万植が短い溜息をついた。

「喆三、お前の言うことがあってるかも知れない。気の向くままに歩きまわれたらどんなにいいだろう」

万植も共感をおぼえたのか、暮れゆく空に澄んだ視線を投げてこう言った。

甲龍はあきれて二人を見つめた。喆三の夢のような話に万植までが同調した。二人がなにかしでかしそうな気がしてきた。二人をどう説き伏せたものか、いい考えが浮かばなかった。だが、黙っているわけにはいかなかった。

「くだらないこと言うなよ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com